

婦人と子ども

第十三卷第四號

病的の虚言

ドクトル 富士川 游

虚言といふのは、自分が善く知つて居るところに反して、不正の陳述をするので、その形態には種々の差別がある。小供が虚言を吐くといふことは、殆ど常習と見ても差支ないほどであるが、その内には、想像に基づいて、虚言を吐くものもあつて、この場合には、事實有り得べからざることの有るかの如くに言ふ。固より人を欺くといふの計畫ではなく、想像の亢進したために、事實無いことを有つたやうに思ふて、虚言を吐くのである。それから誇大に言ふこともある。小供か何かを見付け出してそれを面白く、人に話す場合に、その

事實を誇大に言ふ。即ちホラを吹く。これには虚飾と自負とが伴なふので、小供に自家感覺が生じてそれが一定の度まで亢進してから、この類の虚言を吐くやうになる。懲罰を恐れて、虚言をいふ場合もある。人から何事かを追究せられて一時逃れに虚言を吐くといふやうな場合もある。斯の如く、虚言の形態は、種々で、これをなすの動機も一様では無いが、しかし、その虚言は、何れにしても、道德の缺陷に基づくもので、精神の状態は健康である。それで、この種の虚言をば、**犯罪的虚言**と名づける。しかるに、この**犯罪的虚言**の外

に、病理的虚言と名づくべきものがある。これは精神の異常に基づくものであるから、尋常の虚言から、區別せねばならぬ。

病理的虚言、即ち精神の状態が尋常でないために、虚言を吐くのは、大略左の原因に歸する。

一。事物を観察することが常習的に、不十分なること。

二。追想の錯誤

三。想像力の異常に充進せるがために、覺官的印象及び經驗をば、客觀的に再現するの能力が、侵されること。

右の原因は、精神作用の異常に基づくこと勿論で、デルブリュックはこれに想像性虚言の稱呼を附して居る。多數の場合にありては、この病理的虚言を吐くものも、尙ほその陳述の事實にあらざりしか否かといふことを批評するの能力は、持て居るのである。又、右の病的素因を有するものが虚言を吐く場合にありて、自家暗示が加勢して、何

等かの假想を起すと、これを直ちに事實と認めて記憶の内容に入れて、それを再現するからそれが虚言になるといふやうな場合もある。此の如く、自家暗示が加勢すると、病理的虚言は牢固として授くべからずといふ具合に確定するやうにあるものである。

病理的虚言の場合には、又精神の機械的作用が種々の方向に、侵されて居る。感受したる印象を正しく再現することが出来ぬことは殊に多い。夢と、小説と、實際の生活とから受けたる印象とを、十分に區別することが出来ず、それを、彼此混同して事實と非事實とを分けることが出来ぬので、隨て言ふことが虚誕になるのである。それに、自己を中心とする感覺が充進し、又病理的虚言者に接する人々が、その虚言を信じて傾聴するといふことになる、暗示的に虚言を吐くことが強くなる。場合によりて事實でないこと、事實であることを、自分で知りながら、これを混同して、虚

言を吐くといふやうにもなるのである。

精神の健康なる人でも、記憶が不故意に性質を變化することがあつて、それがために虚言を吐くといふ場合もある。この種類の虚言は、近頃、陳述の心理の研究が進歩したので、明になつたのであるが、すべての人は、一定の事件に遭遇した後一定の時日を経ると、それに就ての記憶は次第に不正となり、又は消散するものである。それで一個の事件を度々報告するといふ場合に方りて、その陳述が、漸次に變化するといふことは間々有ることであるが、これは勿論病理的虚言では無い。

此の如き、病理的虚言を吐くものは、精神の異常、又は異常と健康との境界にあるもので、ヒステ

リー、癲癇、精神病的低格者、精神薄弱等に多くこれを見る。生後に精神薄弱となつたものにも、これを見ることが多くある。

病理的虚言の本性は、此の如きものであるから、右のやうなものを證人として、陳述の正偽を判するの資料に供するといふことは危険である。裁判所で、證人としての陳述を聴くには、十分この點に注意せねばならぬのである。

精神の異常に本づける虚言者を處置するは、精神の尋常なるものと同様に、小供の時代から、教育に注意して、殊に觀察を明確にすること、記憶を再現することを明確にすること、陳述を正しくすること等に、重きを置いて、訓育するを肝要とする。

獨逸に於ける幼稚園改良問題

文學士 上野 陽 一

幼稚園の始めて設けられた本國の獨逸に於て、

近頃如何なる改良問題が論せられて居るかを御紹